

Generalprobe

仲 悟志

登場人物

- 男1 (困惑する男、楽団を担当している)
- 男2 (考える男、施設運営を担当している)
- 男3 (動じない男、舞台監督)
- 女1 (思い出す女、楽団を担当している)
- 女2 (怒る女、楽団を担当している)
- 女3 (戸惑う女、施設を担当している、他の役に比べると勤務の年数が浅い)

最低3名の楽器の奏者。楽器の種類等は問わないが、場に同時に存在できること。

青字・音楽とは直接関わらない。

赤字・ト書、場面の様子で音楽に関わるもの。

円形の舞台がある。

通路っぽさも感じられればよい

そこがどんな場所かはともかく、客入れの間も、ずっと晒しものになっている。

客入れ中の適当な時間に、ひよっとしたら何らかの弾き語りの前座があるかもしれない。注意事項のアナウンス、前説などは入場時かその弾き語りの歌詞にのせて済ませる。前座が無い場合は入場時に諸注意は済ませておく。

舞台上に置いてある譜面立てと椅子を、自分の気にいった場所まで移動させて座る奏者達が居る。彼らは、自分の座る場所を決めた後、各自のノートや譜面と自分の楽器を準備して、舞台上に居座り、耳障りにならない程度の大きさの音で適当な手馴しを繰り返す。その音や、奏者たちのせいでも、客は劇場に入ると同時に自由を奪われ、自らの席を気ままに選ぶことも憚られる様な、なんとなく張り詰めた空気を押し付けられることになる。

劇場の中のとこかというフランクシモン

奏者たちの演奏の音量は常に、登場人物が発する音量に対して気遣いがある必要はない。当然、楽器の音により言葉ややりとりが聞こえないこともある。

また、表記上順に書いてはいるものの、同時に言葉が発される可能性は否定しない。

登場人物は、常に自分のテンポで考え続けており、ある意味で、モノローグの応酬の様に見える瞬間も多い。

会話は、他者の言葉を捉え、自らの思考の流れに当て込んでひたすら言葉を連ねていく行為となるため、言葉を聞き取りやすく発するよりも、何を考えていると見て取れるか、どんなことを話している風に見て取れるかが優先される。

役者間の距離も、何より個々の人物の感情的な適切さを優先する。

開演時間になり、照明が変化して舞台が始まる。ここまでに観客の威圧はある程度終わっていないなければならない。

対面する舞台の両端から、そこを通り過ぎなければならぬ女1と女2が現れる。二人は

スケジュールを書いた紙を挟んだクリップボードを持っている。二人は互いを見て、無言のまますれ違おうとする。

数歩離れたところで、女1が立ち止まり、振り向きもせず発声する。

女1 ねえ。

女2も、無言で立ち止まる。

女1が口を開いた瞬間、発生の直前に、女2が遮る。

女2 思い違い。

女1 まだなにも言ってない。

女2 言わなくていい。

女1 なんで、

女2 (女1が「な」の口を作った瞬間にかぶせて) なんで。なんでもない。

女2、去ろうとして歩きかけるが、

女1 やめてもらえないかな。

女2 やめるもなにも、

女1 それ。

女2 どれ？

女1 それ。

女2 気のせいだわ。

女1 伝わりすぎる。

女2 気にしないで。

女1 呼吸からでも伝わる。

女2 超能力。

女1 誰にでもわかる。

女2 特になにがあるわけでもないのよ。

女1 なにもないくせに凄くはつきりしてる。

女2 読み取りすぎ。

女1 あるじゃない。

女2 考えすぎ。

女1 考えさせるの。

女2 こっち見なくてもいいのよ。

女1 見えるじゃない。

女2 見てから言いなさいよ。

間。

女1が、女2の方に振り返る。

椅子に座る奏者の一人、奏者1が、突然場違いな調子の音を発する。

女1 駄目か。(ここで音がかぶる)これが駄目なら人の心ってなんだ。目に入るから聞きたいの。聞きたくなるのよ。どうしたらいいの?何か助けになれるんじゃないのかとか、どうにかできるんじゃないのかとか、本当に単純にそういうことでしかない。なんでこうも必要とされないのか、そこすら疑問だから、こうしてここにいる必要すら、(奏者1に)ちょっと待って。

奏者1、音を止める。

言葉や意味は通じないと感じさせる。

「場違い」は二人の女の対峙を邪魔しているイメージ。

しかし、1の「ちょっと待って」は通じ、女2は女1の言葉を聞いている様に見える。

二人の対峙に対しては、実は「嘔」の感じ。裏腹。

女1 (奏者1に)ありがとう。

女2 それは思い違い。

女1 絶対違う。

女2 じゃあ、リストにしといて。後でチェックするから。大丈夫。

女2、去っていく。

女1 なにそれ。

女2 よろしくね。

女1 (聞こえないほど小声で、噛み締めて)よろしくない。

女2、女1の言葉を全く無視して退場。

女1 なんなの。

奏者1 気になる?

女1 (奏者1の声に、すぐには反応しない。大きく息を吸う)……。

奏者1 気になるよね。

奏者1、静かに音を発する。

女1、ゆっくり奏者1に視線をやって、静かに息を吐ききり、体に入っていた力を抜く。

女1 涼しい顔しよって。

奏者1の音が、少しだけ女1に反応する。

女1 相手しなくていいから。そんなことよりも、

奏者1の音が止まる。

女1 いいって。

奏者1がまた音を出す。

女1 うん。いや。

女1退場。

奏者1音を止め、譜面に何かを書き込む。
肩を並べて話しながら歩く二人の男登場。

二人の対峙について、奏者1が考えたことは、ここで終了。

男1 で、止めて、聞くわけですよ。(どこかを指差して)「そこだよ。そこ。うん。いや、いいから止めて。うん。もう一回。繰り返ししてみようか。うん。うん。ほらそこ」なんでも繰り返し返させる。で、確かにあるんですよ。その、止める理由というか、繰り返し返させる理由というか。そこがもう、ほんのすこし。もう、本当にすこしだけなんですけど、微妙によれてるってというか、ひよってる。

男2 ほう。

男1 うん。言葉にするなら、うん……。そうなります。癖ですね。癖。でも、本当に微妙な癖です。ただ、確かにそこに気がつく、他の似た様な箇所でもね、癖だなあと思っまって、そこが気になり始めると確かにどうにも……。

男2 ううん。

男1 味とか個性というには、雑というか、そういうレベルじゃない。

男2 良い悪しというか、

男1 あれは悪しですね。

男2 そうか。

男1はそのまま退場。男2はなんとなく考えながら、その辺をうろろろする。

女3が登場する。

女3 仕事になりません。

男2 ……。

女3 仕事になりません。

男2 ……。

女3 仕事に、

奏者が一斉に、バラバラに音を出す。

女3、奏者に視線をやり、舌打ちなど、ほんの少しだけ怒りをちらつかせる様なそぶり。

女3 (負けない様に大声で) 仕事になりません。

女3、とにかく音に負けない様に暴れるが、楽器の音を圧倒することはできない。
奏者の音は、女3が言い終わると同時に止む。

女3 (奏者の隙を突く様に、無音の瞬間にするりと) 仕事になりません。

再び奏者たちは言葉の邪魔をする。
バラバラ=我が事にならない。
女3が女1、女2に挟まれて困る様子を
描写している可能性はある。
「必ず私を挟む」
「ヌムーズじゃない」

奏者、悔しげに短く音を出す。

女3、満足げに笑う。

男2 遊んでるじゃないか。

女3 おもしろい。

男2 そうね。

女3 なんとかありませんか。

男2 どうなったらいい？

女3 仕事さえできればいいです。

男2 どんどん二人に投げていけばいいんじゃないか？

女3 三角じゃないんです。

男2 ん？

女3 必ず私を挟むので、

男2 なるほど。

女3 何が気にくわないんでしょう。

男2 気にくわないのかな。

女3 さあ……。

男2 そんなに困った感じには見えないけど。

女3 表面上はですよ。

男2 表面上ね。

間。

男2 うん。

女3 全部ぶちまけて訴えた方がいいですか？

男2 や、

女3 状況が伝わり切ってない気がします。

男2 その訴えだけで十分だよ。

女3 そうですか。

男2 俺が聞いてもしょうがないけどね。

女3 確かに。

男2 どうなんだろ。

女3 困ります。

男2 そうね。

女3 ええ。

男2 この時期には、たまにあることだしね。

女3 毎回？あるんですか？

男2 たまに。

女3 たまに。

男2 ううん。

女3 たまによくあるやつ？

男2 いやいや。

女3 二人が、

男2 ああ。そうじゃなくてさ、

女3 ？

男2 そうだなあ。予算とか、大きめの方針が決まるような時期には、なにかと心がざわめくもんでしょ。

女3 ざわめき過ぎ。

男2 バッサリだね。

女3 私が斬られてますから。

男2 ちょっとピリピリした感じはさ、

女3 当事者のからの訴えを軽く扱うやつですね。

男2 また、人間きの悪い。

女3 とにかく仕事にならないのが困るんです。

男2 それもそうだね。

女3 あ。

男2 ？

間。

女3 困ってませんか？

男2 ？

女3 仕事にならなくて困ってませんか？

男2 ははは。

女3 自分も困ってるから、私を誤魔化して、自分と別の場所にもグダグダがあるなあっていう、

男2 オーバーだよ。

女3 あるなあってのをとにかく心の支えに、やり過ぎそうと思ってませんか？

男2 そういうわけじゃないよ。

間。

女3、男2をそっちのけで、奏者たちを見回す。

男2 大丈夫。違います。

奏者が弱々しい音を出す。

女3 (奏者を賞賛して) いいっすね。

男2 ……違うね。

女3 そうですか？

男2 うん。

女3 ううん。

困り果てた女3の様子を表現していると、女3は感じるだろうか。
女3は、男2に対しても同様に、奏者からアシストする様なイメージで
奏者が音楽を奏でた様に感じる。

男2 うん。気のせいですよ。
女3 なんてそうなるんですか。
男2 あら。
女3 あら。
男2 なんとかなるもんだよ。
女3 やっぱり。
男2 ははは。

男2、退場する。

男3、舞台の端に登場している。

女3 どこに心を求めるのかと聞かれてしまうと、うん。……どうしたら誠実な解答になるのかと考えてしまう。

男3は、他の人物よりも視点的に一歩、二歩距離が遠い。
現場に近すぎて、かえって心が動かなくなっている。

男3が女3に話しかける。

男3 誠実さ？

女3 その通り。誠実さですよ。

男3 どこに心を求めるのかと聞かれてしまうと、さて、どうしたら誠実な解答になるのかと考えてしまう。なにを聞かれているんだろっね。聞かれているってことは、求められているってことなんだろうか。

女3 あー。

男3 ん？

女3 拾った上にそのまま復唱とか、普通やります？

男3 おお。

女3 ええ。

男3 そうなの？

女3 煙に巻きにきてません？

男3 あれ。

女3 通じません。

男3 そっか。

女3 そもそも、かなり深刻な状況だと思うんですよ。

男3 そんなこともないよ。いつもの調子じゃないかな。

女3 私の経験が浅いだけですかね。

男3 立場も？

女3 立場。

男3 俺には、そもそも影響ないからなあ。

女3 私たちの仕事は、なんにも変わりませんよ。

男3 そうだよな。

女2が登場する。

女2 ちょうどいいところにいた。

男3 どっちが？

女2 こっち。

女2が女3の手を取る。

女3 ですよ。

女2を、女3が連れて行く。

男3 誠実か。 *君が口走るか「誠実」と。*

奏者がそれぞれ勝手に何かの音を出し始める。

男3 誠実だとズレるよね。何に誠実かっところからスタートだよ。

音が止まる。

俯瞰する舞台監督。

この視点は本当に誠実なのか。

ただ、機械的に進行を決めているだけではないのか。

男3 スタート？

奏者2 ストップ？

奏者3 スタート？

男3 ゴールはどこだ。

奏者1 スタート。

男3 ストップ。……ゴール。……ストップ。……ゴール。 *何かの着地感。*

間。

*「舞台監督」「スタッフ」「奏者」
三つの立場の存在。*

男3は、奏者たちが音を出すのを待つ。
待つが、誰も音を出さない。

男3 涼しい顔しよって。

間。

男3 そうだね。しょうがないか。 *序盤の終了。*

奏者たちが、てんでんばらばらに音を出す。

男3が退場する。

奏者たち、音を止めて、各々の楽譜になにか書き込む。

女2が舞台中央に駆け込んでくる。

女2 なにをしていたんだって話ですよ。違う？ずっと右肩あがり。確実にお客さんを増やしていたはずなのに。選曲がダサかった？そもそも求められていない？そんなわけない。私たちに原因はあるの？なんにも、全く、なにひとつ思い当たることがない。

間。

女2 一人不要と判断した理由を教えてください。

男1 登場する。

男1、登場して口を挟みながらも、女2の追求に正面から耐えられない。

男1 一人不要という判断じゃない。一人減らせば、対応できる金額ってことだよ。

女2 減らさないやりくり。考えましたよね。

男1 継続中。

女2 客演を呼ばないとしたら、誰を呼ばないのかも、

男1 それもまだ、可能性はなしだよ。

女2 何もしてないわけじゃない。

男1 そうだね。

女2 今の編成じゃダメなんですか？

男1 誰もそんなことは言っていないよ。

女2 予算がそう言ってます。

男1 それは人じゃない。

女2 作った人がいますよ。なんとなく検討しました。実際に組んでみました。会議もあつただろうし、それを承認するために、多分、改めているいろいろ確認したかもしれない人たちも。

男1 関係者シラミつぶしに説得して回る？

女2 どうなりますか。

男1 無理だろうね。

女2 組織ですね。

男1 そうだね。

女2 無駄だった。

男1 お客さんは増えたよ。

女2 微増ですね。

男1 そうだね。

女2 本当に、これまでやってたことと無関係だったとしてもイライラする。

男1 原因？

女2 無いとか、考えられない。

男1 こっちには関係無い事情かもしれない。

女2 そうなら、もっと情報があると思います。

男1 うん。

女1、登場する。

女1 (男1に) ブッキングの、ブッキングの話し……。

女1、女2の姿が目に入り、顔色が変わる。きびすを返して、去りかける。

女1の反対側の通路から、男2が舞台上に向かって歩いてくる。

女1 事務所の方に置いておくから、確認お願いします。

女1、退場。

男2 (去っていく女1の背中をぼんやり見ている) ……。

奏者、各々小さな音を出す。

やはり状況はまだどこか、バラバラなのかもしれない。
いや、バラバラだ。奏者たちもその様子を見ている。

男2 去っていった女の心。

男1 目の前が暗くなる？

チンパンジー

そんな男たちを置いて、女2、気配もなく、男2が登場した方向に退場。

男2 君がいなくては。

男1 そうだね。

男2 ややこしいな。実際去るんじゃないかって、呼べないんだけど。

男1 うん。

男2 ここだけの話し、かなりいい形でシーズン終わって、

男1 それは、ここだけじゃなくて、

男2 お？

男1 誰もが確かにそう感じたんだよ。

間。

男1 ん？

間。

男1 感じなかった？

間。

男1 感じたよね。

奏者たち、音を出す。

男1 うん。

奏者たち、音を止めて、自分の楽譜に何か書き込む。

男1と男2の意思疎通は確認できたものの、状況には変化が無いことが記録される。

男1 (ここで初めて、男2と話しをする) そんなわけですね。

男2 はい。

男1 一体、なんでこんなことになってるのかって話しですよ。

男2 そうだね。

男1 思い入れはわかりますよ。

男2 うん。

男1 そんな人でしたっけ？

男2 そこか。

男1 基本的には、みんな涼しい顔をしているんだけど、

男2 基本的にはね。

男1 世界が終わる人は居ないからなあ。

男2 そうだね。

男1 よくある話しというかですね、

男2 たまによくあること。

男1 それ。

男2 うん。

男1 そんな意味では、なんにも迷うことないですよね。

男2 からっとしたもんよ。仕事だし。

男1 それ。

奏者たち、低く長く音を出し始める。 二人の楽譜に水をさす。

長い長い間。

男2 からっとね。

男1 そういって感じていって思っんですけどね。

男2 うん。

奏者たちは音を続けている。

男1 そういって感じ。言葉の吐かれ方としては、妙に曖昧。

どんな風に「そういう感じ」なのか。

奏者たちが出す音が揺らぐ。

水をさしたものの、そのイメージを肯定されてしまい、音を止めて、少しだけ奏者間のアイコンタクトのある感じ。

男1 感じね。

男2 うん。

奏者たちが音を止める。

男2 ああ。そうかな。

奏者たちが、やや高らかに音を立て始める。

女1 登場。

男2、女1を見て、

P2の女1の言葉を遮ったものと同じイメージでも良いかもしれない。
ここでは女1に強い感情も言葉もないため、まるで登場の音楽の様に
なってしまったと感じ、奏者たちは演奏をやめる。

男2 あ、今、事務所に行くよ。

女1 後でもいいですよ。

男2 そうもいかないでしょ。

女1 そうですか？

男2 うん。

女1 あくまでも素案というか、

男2 そりゃね。

奏者たちの出す音が、徐々にばらけていき、消える。

女1 どのパートでいくかって、どの程度結論出てるんですか？

男2 まだまだでしょ。

女1 一応なんで、とりあえず、まだ完全に絞ってない状態なんで、

男2 うん。

女1 困りますね。

男2 そんな年もあるよ。

女1 ありますか。

男2 どう見てもね。

女1 はい。とりあえず、リストにしてあるので、

男2 うん。

男1、男2、退場する。

十分な時間の沈黙。

女1 何をどんな順番で書き連ねてみても、同じ結果だ。音が変わる？そんなことに気づく人はいるんだろうか。何をそこに乗せるのか。どちらにしても、それはもう、私の手から離れたもので、私には触れられない。

私に触れられないもの。

間。

今と過去。

女1 何をしたかったのかじゃない。そこにあることだけが重要だったのに、あのとき自分が何を考えたのか、もう、はっきりと思いつけな。

奏者たちが、鋭い音を立てて、女1のセリフを妨害する。

女1 ……思い出せないなんてのは嘘。でも、今は……。今、自分のこととして考える時間はとくに終わっている。何を続けるのかを考えたんじゃない。どう辞めるのかを考えていた。だから、とくに折り合いはついていない。

奏者2、ゆっくりと静かに音を出す。

**強い「感情」はデキメンに奏者たちに乗られてしまう。
女1が気を鎮めようとするれば、そこも見てとられてしまう。**

女1 本当だろうか。

女1、大きく息を吸う。

女1 (ゆっくりと静かに) 何も思い出さない。何も思い出さない。何も思い出さない。何も思い出さない。

**忘れてきはおさまるのか？
忘れようとしている時点ではまだ、忘れることに成功していない。**

女3 登場するが、様子を見て気配を殺している。女1は、女3に気づかない。
静かに音が流れている。

女3 とにかく、聞かなくても聞こえてくる独り言を聞き流すところからスタート。

男1、女3の反対側から登場して、舞台へ。

女1 (女3に、何かを言おうとするが、言葉にならない) ……。

女3 口開くだけじゃ、言葉は乗らないですよ。

女1 ……睨み殺したい。

女3 死んだと思います。

女1、男1の気配に気づいて大きく振り返る。

二人はわけもなく絶叫のやり取りに、やがて奏者たちも音を乗せ始め、声が完全にかき消される。

女1 な、

男1 誤解だ！誤解してる。

女1 なにが、

男1 なにも知らないです。俺は知らない。

女1 知ってるじゃないですか。

男1 知らないって。

女1 履歴書読んだじゃん！

男1 知らないって！

女1 履歴書！

**やはり、言い争いは奏者たちの餌食になる。
奏者たちの俯瞰。**

男1 知らない！
女1 履歴書！
男1 知らない！
女1 履歴書！
男1 知らない！
女1 履歴書！
男1 知らない！

過去。

女3が無言のまま静止の合図を奏者に送る。
奏者の音が止まる。

女1 履歴書！

沈黙。

男1 ああ、そうだね。うん。そうだ。

意思疎通できることが、ある種コミカルと感じられる。

距離感。

男1、あとずさっていく。

描写、俯瞰、BGMでないとするなら何か。

男1 忘れよう。忘れた。忘れてる。忘れました。うん。よし。うん。さて……。
忘却。

男1、走り去る。

女1、男1の背中を目で追う。

女1 なんでこんなことになるかな。

女1「だるまさんがころんだ」よろしく振り返り、女3の視線を捉える。

女1と視線が合ってしまった女3、ゆっくりと後ずさる。

女1 死んだんじゃない？

女3 多分、

女1 うん。

女3 はい。

女1 うん。

現在。

女3 聞いてもいいですか？

死。

女1 死人に、

女3 耳なし。

忘却。

女1 いいね。

女3 はい。

立ち尽くす二人。

沈黙。

女3 (奏者たちに) ここですよ。

沈黙。

女3 (奏者たちに) ここだと思っんですよ。

長い沈黙。

女1 うん。

女3 聞きたくなりますね。

女1 聞く？

間。

男3登場。手には、幾つかのクリップボード。

奏者たち、なんとなくバラバラに音を奏ではじめる。

男3 香盤表だよ。

女3 おお。いいタイミングです。

女1 いいの？

女3 屍は、これにて失敬します。

男3 屍？

女3 新鮮な死体です。

男3 フレッシュ。
fresh 新鮮

女3 そりゃもう。

女1 死体か。

男3 死体ね。

女1 何がしたいの。

女3 ふ、普通に仕事したいです。

間。

男3 したい。

女3 デス。

男3 死んだらそうね。

女3 仕事、

男3 や、

女3 ええい。

女1 それもそうね。

女3 そうですよ。

しかし、奏者は都合よく利用できるものではない。
それが距離感かもしれない。

舞台監督に対する奏者たちの距離感。

心はともかく、駄洒落は通じることが見えて、
バラバラのままでも軸が変わると通じるものがあると、
そんな描写で構わない。

男3 普通って、
女3 そこですよ。
男3 そっか。
女1 そうね。
男3 まあ、
女1 (男3に手を出す)……。
男3 (女1と女3にクリップボードを渡す)……。
女1 事務所に(更に他のクリップボードも受け取る)。
男3 (持っていたクリップボードを全て手渡してしまう)よろしく。

女1退場。

奏者たちの音が収斂していき、止まる。

奏者たち、各々譜面に何か書き込む。

バラバラでも何かは通じあう。
進行という軸に従うことについて、奏者たちも考えてしまう。

女3 むー。
男3 うん。
女3 次のですか？
男3 や、再来週のピアノの発表会。
女3 ああ。
男3 うん。

女3、クリップボードを眺める。

女3 (女1は)特段関わらないんだから、
男3 まあね。
女3 (女1がクリップボードを要求しなくても)別にいいですよね。
男3 言わないの。
女3 (事務所に)運んでもらうだけ。
男3 うん。
女3 管轄違うし、
男3 管轄って、
女3 係。
男3 うん。
女3 どっちにしても、そうですよ。
男3 どっちにしてもね。
女3 どうも復唱気味ですね。
男3 おっと。
女3 イラッとする。
男3 ん？
女3 はい。
男3 普通は逆じゃなかった？

女3 そうでしたっけ？
男3 うん。
女3 (ため息をついて) イラッとする。こう、イラッと……。
男3 どっちにしても……。

舞台監督との距離、進行のイメージ。

奏者2、静かに小刻みに音を出し始める。

小刻みとはあくまでもイメージで、スタッカートするという意味ではないので注意。

男3 うん。どっちにしても、俺にしてみれば、そもそもそんなもんじゃなくてね。……ほら、こうやって香盤表を書いて、その通りに動いてもらうだけの話しです。それは俺が作る。で、この紙に従うことについては、誰にもどうしようもない。

女3 はい。

法則は絶対で、それを決めた者もその法則に縛られる。

男3 うむ。

ルールを決めて従う。果たして気楽か。

女3 そこはでも、

男3 ん？

女3 ううん。

男3 どこがスタートで何を見てるかってことだよ。

女3 戻りますね。

男3 どんなにお膳立てしようがなにしようが、板に付けなきゃどうにもならんじゃない。
女3 そりゃそうですけど。

男2登場。手には、おそらく女1から受け取ったクリップボード。

奏者3も、静かに小刻みに音を出し始める。

男3 ピアノの発表会の子供も、合唱団のおばちゃんも、ここに来るからね。

男2 お。なんか意地悪な話し？

女3 また。

男3 何がどう意地悪やら。

男2 あれ？ははは。いいや。香盤表の件。

男3 お。

男2 (男3に見せながら) 去年はなんやかんやで結構スムーズにいったけど、今年はなんかちょっと不安なんすよ。

男3 あら。

男2 もうちょっとだけ、間をあけ気味で先方と打ち合わせしときたいなあと思って。

男3 終わり時間とか、大丈夫かなあ。

男2 うん。不安なのは途中の出し入れだけですな。メンバーに動きがあったみたいなんです、

男3 様子見。

男2 今年は多分、わかってるわー。って感じで勝手に動いて混乱させちゃう人が、

女3 おばちゃんだ。

男3 底意地。

男2 お、意地悪な話した。
女3 あ。
男2 (男3に) ねえ。
男3 (男2に) ね。
女3 ひどい。

奏者2、3の音が止まる。

男2 おばちゃんはね。
男3 影響出るね。
女3 思うんですけど、あらかじめこんな風に準備するから、それに従うだけって話しになるわけじゃないですか。
男3 うん。
女3 つまり、とにかく機嫌良く準備をするだけでいいじゃないかっていうのは、
男2 それは、混ぜすぎ。
女3 ぶった切りますね。
男2 だってそうだよ。
女3 そうですか。
男3 そうだね。
男2 人には行く末だけじゃなくて、来し方ってもんがあつてさ。
女3 腰肩？
男3 凝るやつ。
女3 え？
男2 過去とか記憶とかね、
女3 ですよね。
男3 難しいもんだね。
女3 間違えた？
男2 間違いの始まりだよね。
女3 間違つてないですよ。

間。

男2 とりあえず、事務所で調整しましょうよ。
男3 そうですね。
女3 あ、
男2 ん？
女3 流れました。
男2 うん。
女3 来し方。
男2 行く末。
女3 それ。

男2 うん。
女3 履歴書。

男2 履歴書？

女3 ちようどそんな言葉が出てたんです。

男3 ああ、

男2 混ざったね。

女3 そうですか？

男2 うん。

女3 ごまかし。

男2 オーバーだね。

男3 オーバーかな。

男2 そりやもう。

男3 うん。

男2 (二人に) 事務所。

女3 私も？

男2 ん？なんかあんの？

女3 なにもないです。

男2 そっか。じゃあ、事務所へ。

女3 ううん。

男2 (曖昧な反応) ……。

女3、促されるままに退場。

男3もそれに続く。

男2 ……。

奏者たち、楽器を構える。

次は何か始まるか。

男2 ああ。そうだなあ……。

間。

構えてみても、結局はバラバラの残滓。

男2 うん。毎度おなじみのやつですよ。結局はね。……毎度か。……毎度。毎度じゃないよね。毎度だと困る。うん。そんなことはない筈だ。

奏者たち、一斉に、小刻みに音を出し始める。

男2 決めるから苦しくなる。決めたら楽になる。……いや。……柔軟さを無くすからおかしなことになるんだよ。……なんてこと、口走るわけにもいかんですね。

何を今更という突き放した感じが、男2に伝わる。

奏者たち、音を止める。

男2 うん。タイミング悪い。……そもそも、そんなもんか。

女2 登場。

無言で立ち尽くす二人。

男2 ただの上り調子つても、面白くないでしょ。

女2 ……どういいう言葉を期待してるんですか。

男2 優しい言葉がいいなあ。

女2 奇跡が起きて、何かが救われるっていう場面じゃない。

男2 誰かがすごいアイディアを思いつくってお話してもない。

女2 誰が誰のことを思いやってあげたらいいんでしょうか。

男2 思いやり……。相撲部屋みたいな。

女2、無言で退場しようとする。

男2 待った。

女2 私も適当なことを言いました。

男2 ……。

まるで踊っているかの様に相手に詰め寄ったり、歩みを止めたりする二人だが、互いの距離は決して縮まない。

男2は、女2と会話しながら、自らの腹案のことも考えている。

女2 抵抗は無意味。

男2 そうかもしれない。

女2 実際には……。実際にはなにもしていない。

男2 そうかもしれない。

女2 何も伝わらない。

男2 誰に。何を伝えようか。

女2 そうですね。

男2 どうやって伝えるのが、一番効果的なんだろう。

女2 ……。

男2 ただ、感情を乗せて、

女2 こうやって話しをしていけば、順番に折り合いをつけていくしかなくなる。全部わかっていること。ただ感情を乗せて。ただ感情を乗せて私は、ただこうしてここにいるだけで……。なんにもならないことでイライライしているだけ。駄々をこねている子供よりも悪い。

男2 ああ。

女2 でも、こうやって自分と対面してしまうと、どんどん解体していくんですよ。消えていく。消すつもりもないものが消えていきます。

男2 うん。

沈黙。

男2 うん。そんなつもりじゃなかった。

女2 本当ですか。

男2 あ……。

女2 なにも起こらない。

男2 なにも起こらないですね。

女2 この怒りが消えてしまえば、ただ普通にシーズンが始まる。

男2 怒ったまま続けることもできるよ。

女2 これが普通になるまで、ずっと続けるんですね。

男2 そうだね。

女2 ……。

男2 ずっと、続けることもできるね。

女2 できますよ。

男2 そうだね。

女2 なんとかしたい。

男2 うん。……具体策を。

女2 そんなもの。

男2 ……。

女2 具体策があると思ってますか？

男2 ある。

女2 ありますね。

男2 そうだよ。

女2 思い巡らせれば、いくらでもたどり着く先は見つけられる。

男2 正しいかどうか関係ない。

女2 実際は。

男2 満たされればいいだけだからね。

女2 正しさのかけらもない。

男2 必要かな。

女2 それだときっと、また同じことが起こる。

男2 うん。

女2 ただ欲望を満たすためだけに、仕方がなかったとか、

男2 そう思う？

女2 思います。

男2 そうか……。

間。

男2 ましな理由をさがせばいい。

女2 理由さえあれば、
男2 なんにもないよりマシだ。
女2 理由さえあれば、
男2 ただの腹いせでもいいんじゃないか？
女2 腹いせ。
男2 腹いせ。すっきりすると思うよ。
女2 多分……。

新しいルールを作る。
ルールは定まるのか？

舞台上の動きが止まる。

長い沈黙。

奏者2が、低く、不安げな音を出す。

女2の不安、不満。

女2は、今に合わせるには、新基準を作ってしまうと考えていて、それを許容できない。

奏者たちが女2を後押しする布石が始まる。

男2 ようやくなにかが噛み合ってきたみたいじゃないか。
女2 勘違いですよ。
男2 あれ。
女2 終わりが見えなくなるやつだ。
男2 あら。
女2 ルールが変わる。
男2 変えてもいいじゃない。
女2 わかりますよ。
男2 うん。
女2 なにを歯止めにしますか？
男2 歯止め？
女2 自分でルールを決められるんですよ。
男2 強い心が必要だね。

音が止まる。

無言で立ち尽くす二人。

女2 それは、
男2 お金で解決できるよ。
女2 お金の問題だと思えば。
男2 いまどきは、いろんな方法あるじゃん。
女2 ありますね。
男2 提案してみる？
女2 提案ですか。
男2 穴埋めだよ。
女2 それが、

間。

男2 それが？

女2 穴だと認めてしまうと、本当にそこに穴ができます。

男2 必要ですよ。

女2 それを埋め始めたら、

男2 手立てはある。

女2 穴は存在する。

男2 どこから見てもね。

女2 それは……。そうすると、永遠に穴を埋め続けることになりませんか？

男2 そうかな。

女2 多分……。

男2 それが仕事じゃない？

間。

女2 踏み留まる理由、

奏者達が、女を後押しするかの様な音を切れ切れに奏で始める。

男2 ……。

女2 消えていくはずのものですよ、

男2 消せばいいんだよ。

女2 違う。

間。

女2 瑕ができた……。ここに大きな穴があると感じる人間が、一体どれだけいるんですか？

男2 そこにも怒ってた。

間。

女2 そうですね。

間。

女2 足りない。

舞台上に動きが戻る。

女2 足りないまま。

男2 どうするの。

女2 聞いてどうするの。

男2 うん。

女2 二人は動かない。

男2 うん。

女2 できることはある。

男2 できることはある。

女2 それは……。

女2、事務所の方に退場しかける。

男2 動かないんじゃないのか。

女2 まだ折り合いをつける必要はない。

男2 待った。

奏者たちの音が少しずつ高まっていく。

二人は立ったまま。

女2 まだ、折り合いをつける必要はない。

男2 いつまでも、

女2 そんなに時間が経ってますか。

男2 見方によるね。

女2 永遠には程遠い。

男2、これ以上の会話は無駄と判断したらしく、女2の横を通り抜けて、事務所の方に向かう。

男2 立場による。

女2 なるほど。

男2 退場する。

女2 何かを考えながら歩く。

奏者たちが音を止め、譜面に何かを書き込む。 **女2の不安は、奏者たちに把握された。**

女2 意味がない。……意味がない。どの場所からも、何処にでも接続する。本当は……。莫迦だ。折り合いをつけるなんて口走るから、こんなことになる。なんでケチがつくのか。そこだ。なんでケチがついたってことが共有できないのか……。そこだ。何に対して……。どうしても……。どうしても違っていく。

女2、誰を想定しているのかは不明な一人芝居を始める。

女2 「音が変わる。」「そうかな。」「大げさな。」「変わりますよ。」「

間。

女2 あらゆる心が音になって伝わっていくのに、それが変わってしまう。また最初から向き合うこと。そう。もう一度。もう一度最初から。わかっている。心を、感情を込めて、一から作り上げる作業をする。もう一度。……これまでのことを否定されたから。そこに怒りを感じている。

間。

女2 わざわざ向き合う。わざわざ……。本当は、そんなことしない……。

演劇なので、フレイションなので、そんな言葉でもよい。

女2、無言でゆっくりと舞台上をまわり、事務所とは反対側に退場。

沈黙。

奏者たちが、バラバラに何の気ない音を出し始める。

男1。椅子を携えて登場。

ここまでの密度によっては、インターバル的な空白になってもよいかもしれない。

男1 ……。

男1が舞台中央に座ると、奏者たちが音を止める。

間。

男1、立ち上がり。奏者たちを見回す。

男1、咳払い。

男1 バラバラでいいんだ。音がある方が助かるな。助かるよ。

奏者たちは反応しない。

男1 うん。……助かるんだがなあ。

*彼らの状態に、そのまま乗る奏者たちだろうか。
男1は何を期待するだろうか。*

男1。椅子に座る。

沈黙。

男1 来し方になんの意味がある。今なにをするかじゃないかな。……前を向いていこう。

間。

男1、ため息をついて、何か考えながらうつろうつろする。

男1 もっとひどいこともあったよ。や、もっとひどいことってなんだ。それじゃないかん。……うまくいくんだよ。ちがうな。いってない。いや、それは、それも違う……。なんだろう。どうしたもんだらうなあ……。ああ、全く。……くよくよしている人間を励ますって、

難しいよね。

間。

男1 このままここで、ずっとこんな風に……。一体、何をしているつもりになるのか。自分たちが何者なのかを……。何者か……。それにしても、なんでこんな妙なことになってるんだ……。

男1、立ち止まって奏者1を見る。

男1 うん。

男1、再び歩き出す。

奏者1が、あまりやる気のある風でも無い音を奏で、奏者2、奏者3もそれに続く。

男1 なんだろうか。なんだろうね。このままにしておいても別に困りやしないんだよ。ただ、それは少しだけ違うんだ。本当は、全部このままにしておいても構わない。構わないけど……。構わないね。本当はね。

口を閉ざした男1は、奏者が奏でる音をゆっくりとした歩調で聞き入りながら、無言で歩き、やがで椅子に座る。

奏者たち、ふわりと演奏をやめる。

沈黙。

やはり、女3が感じている困った感じ、バラバラの感じは、解消しているわけではない。
男1は、奏者たちの発しているメッセージを感じ取る。

男1 うん。迷っていてもしょうがない。(溜息) だからってねえ……。

男1、立ち上がる、そこに、女3登場。

二人は、ちぐはぐに追いかけている様にか、ただ男1が立ち尽くす女3の周辺をうろろしている様に見える。

男1 おや。

女3 はい。

男1 や、

女3 はい。

男1 うん。

女3 はい。

男1 ははは。

女3 お茶を、

男1 うん？

女3 透明なお茶は何処だと、

男1 うん。濁っていてね、あの、毛みたいなのがちょっと浮かんでるのがまた、高級なん

だよ。
女3 いい豆知識ですね。
男1 うん。
女3 不安でさまよっているわけですが、
男1 そうなの？
女3 初めて知った様な顔しますね。
男1 お。
女3 まともじゃないですよ。
男1 必要な仕事が全く止まったとか、そういうんじゃないからさ、
女3 よくご存知ですね。
男1 いやでも目が届くからね。
女3 不安でさまよっているわけですが、
男1 そうなの？

長い長い間。

女3 多分、あれですね。生物はこうやって進化するか、絶滅するかするんですね。
男1 ほう。
女3 死んだ。死にました。
男1 うん。
女3 まるで、ゾンビみたいな。
男1 死んでないよ。
女3 死んだと思います。
男1 大丈夫。生きてるよ。
女3 生きた心地がしない。
男1 ってことは、生きてるんだよ。
女3 言い方ですね。
男1 言葉だからね。
女3 気休めになりません。
男1 考えすぎ。
女3 考えすぎ。
男1 死んでも言葉。
女3 そうですね。
男1 死んでもなお、さまよっているわけか。
女3 不安で。
男1 腹減ってるんでしょう？
女3 いいえ。
男1 ゾンビはさ。

間。

女3 何か違う表現をした方が良さそうですね。

男1 表現か。

女3 あ。……言い方が。

男1 うん。

女3 でも、勇気を振り絞って、機嫌よく仕事しませんか？って、提案したら、メデューサの視線はこうだったんじゃないかってくらいの、

男1 お。ゾンビから石に変わった。

女3 意味がなかった。

男1 そんなことないよ。

女3 とにかく、

男1 言ったんだ。

女3 え？

男1 機嫌よく仕事しましょうって。

女3 はい。

男1 凄いな。

女3 下っ端が身を守るには、死ぬ気で主張するしかなくて、
男1 なるほど。

男3が登場する。

女3 死にましたが、

男1 生きてるから、ざわめくんだよ。

女3 出た。

男3 最後は全部そこ。

男1 そうなんだけどね。

女3 喧嘩してる様にしか見えないんですよ。

男3 まだそんなこと言ってるのか。

女3 言いますよ。長いですよ。

男1 そうだね。

男2が登場する。

ちぐはぐな追走は、さながら、女3を取り込む籠目籠目に変化していく。

女3 私に、長々と何かの逸話でも喋られるだけの人生でもあれば良かったですかね。

男1 難しいよそれ。

女3 そうですか？

男3 経験とか？

女3 経験。ベテランに伺いたいです。

男2 話せば長くなる。

男3 結局、ただの長話しだね。

男1 それ。「結局なんだったんですか？」ってね。

男2 あ、それぞれ。
女3 言いませんよ。

間。

女3 言わないと思います。

間。

女3 言いませんよ。
男2 いやあ、言われたことあるなあ俺……。
男1 あ、俺も。
男3 話が長いから。
男1 うわ。
男2 でも、ついね、
男1 そうだよね。
女3 もう。
男1 結構大事なことだなあと行って、つい膝を正して、
男2 そうなんですよ。で、こう、
女3 だから、なんですか、ここぞとばかりに！
男1 長かったかな。
男3 長かったんでしょうね。
男2 意味が無かった。

間。

女3 はぐらかしますよね。
男1 お。
男2 や、
男3 そうでもないよ。
女3 ありますよ。
男1 そうかな。
男2 ううん。
男3 ははは。
女3 どうもあれですよ。

間。

女3 うまく言えませんが、本当にこんな悪い雰囲気、適当にやり過ぎそうって考えてま
せんか？……それは、私が下っ端で、経験がないから慌てふためいているだけですか？……
経験が無くてはわかりませんよ。だって、今まで通りか、それよりもちょっと余裕が出るんな

らしいけど、ケチがついたわけじゃないですか。しかも、ほんの少し。その、ほんの少しの理由も、なんだかよくわからない。私でも諦められませんか。でも、計画立てて、いろいろ動いていかなきゃいけないくて、そしたらやっぱり、どうやってもできる範囲で対応していかなきゃダメで、そこに、それ以上のことを挟むと、その分余計に苦しいですよ。

男1 おっしゃる通り。

女3 度が過ぎてます。

男1 過ぎてるかな。

男2 感受性というかね、

男3 気にしすぎだよ。

女3 「おっしゃる通り」を採用します。

男1 あれ。

女3 必要ないんですよ。……私を挟む必要が無いのに、圧力と一緒に仕事が降ってくるんです。

男2 おお。

女3 わかりますか。とにかく本当に全く必要ない私を挟んでくるから、私はずっと自分の必要無さと同じ合ってますね……。わかるんですよ。苛立ちもなにもかも、とり繕いもせずそのまま圧力になって一緒にくるとか、こんなの普通なわけじゃないじゃないですか。

間。

男1 おお。

間。

女3 なんですか。

間。

男3 何か考えなきゃね。

男1 そうだね。

男2 うん。

女3 なんでそこで始めて通じるんですか。

男1 ん？

女3 納得いきません。

男2 あー。

男1 話せば長くなる。

男2 長いやつだ。

女3 むき出しの苛立ちが音も無くのしかかってくるんですよ。言葉もない。ただ、私にめがけて、

「ペラペラ」 + 「むきだし」の苛立ちが、
やがて女3がロソクをするに至らしめ、何かの形になっていく。

奏者たちが女3の声をかき消すほどの荒々しい音を出す。

女3も、それに合わせて声を荒げて、演説調の身振りもオーバーになっていく。

女3 何と向き合えていうんですか、予算？編成？何を計画しているんですか。音楽そのもの？そこにある心？芸術性？理解できない！（演奏が急激に最高潮に達し、そのまま口パクで身振りを続ける）何を一体……。

もはや奏者たちの音と一体化した女3の演説が続き、終わる。

女3は全力を出し尽くした様子。

男1 ごもつとも。

ピークの後であれば、これもカタルシスかもしれない。

男2 うん。

聞の悪い、意味を感じられないカタルシス。

女3 口パクです。

男2 関係ない。

女3 喋ってなかった。

男3 十分だ。

男1 関係ない。

女3 関係あります。口パクだったんですよ？

男1 伝わったよ。

言葉も意味もなく、ただイメージで伝わるとは。

女3 またこれだ。

何が伝わったか。

男1 良い意味だね。

男3 そうだね。

男1 うん。なんとかしなきゃね。

男2 大丈夫。流さないから。

男1、男2、何かを考えながら事務所の方に退場。

女3 そんなこと言って、またこうやってとり残されても……。

男3 ずっと同じわけではないよ。

女3 時間が経ちますから。

男3 悲観的だね。

女3 なにがなんだかわからない。

男3 わかる方が珍しいんだよ。

女3 ……。

男3 あれ？

女3 わかっています。

男3 うん。

女3 そうですよね。……わかっています。

男3 うん。……悲観、

女3 しなくていい。

男3 そうだね。

男3、退場。

女3 でも、やっぱり取り残されるわけですよ。

女3、ゆっくりと舞台をまわる。

女3 結局は……。

女2が登場する。

女3は、女2に気づくが、かける言葉がない。

女2、椅子に座る。

女3 結局は、なんですかね。

女2 ん？

女3 結局は、なんなんでしょうか。

女2 結局は……。

間。

女2 結局の時点で、何かが残っている必要があるの？

女3 ないですか？

女2 ある様な、無い様な。

間。

女2 無い。前向きに。

女3 いいんですか？

女2 捨ててしまえ。

女3 おお。

女2 高く積み上げて踏み台にできたら、次の高みにいっただけじゃない。

女3 上を向いて、

女2 泣かない。

女3 涙はない。

女2 その通り。

女3 ずっと、

女2 止まったら死ぬ。

女3 ですよね。

女2 死んだら、

女3 死んだら？

女2 死んだらどうしようって考えてたら、ずっと死なないの？

女3 死にますね。

女2 死ぬ前に、死んだ後のことを考えておくことはできる？
女3 私が死んだら、あとは誰かにお願いするしかない。
女2 そうね。
女3 死んでますから。
女2 ちゃんとしてももらえるかな。
女3 なにを？
女2 うん？
女3 わかりません。
女2 なにより、自分がどんな風に腐っていくか、焼かれてどんな骨を残すのかは決められない。
女3 はい。
女2 ああ、でも。そもそも、死んだらどうなるかわからない。
女3 そうですね。
女2 腐り方も、骨の残し方も、ひよっとしたらなんとかなるかもしれないけど、今は、死んだ後のこと、計画できないね。
女3 できませんね。

間。

女3 あれ、そんな話でしたっけ？
女2 何も残っている必要はない。
女3 はい。
女2 使えるものがあれば使う。
女3 はい。
女2 前向きに。
女3 はい。
女2 死んだらどうしようとか、考えても無駄。
女3 はい。
女2 うん。
女3 既にゾンビです。
女2 うん？
女3 死人に耳なし。
女2 ……死んだら、そうね。

間。

女3 たとえ話しですよ。
女2 うん。
女3 涼しい顔か……。

間。

女3 事務所に用事を思い出しました！

女2 ……。

女3 いらぬ。前向き。考えぬ。失礼します。

間。

女2 (少し笑う) まあ、いいか。

奏者たちが奏でる音は、女2の心が穏やかさと、そこに同時に存在する苛立ちを描写するかの様で、女2は、一瞬それに聞き入るが、決然と宣言する。

女2 わからなくてもいい。伝わる必要はない。

女2に構わず、音はよどみなく流れ続ける。

女2 伝わる必要はない。今は……。もしかしたら、永遠に。大切なのは、そこにあること。確かにあったということ。完全に記憶される必要もない。ただ、存在しなかった、無かったことにさえならなければ、

いつの間にか、女1がそこにいる。

女1 存在しない。ずっと。本当は、ずっと。最初からここにいなかったことを思い知る。なんで私は、こんな場所に居るのか。どうして、まだこんな風に音楽に関わっているのか。思い出す必要はない。必要以上に……。こんなこと、どうでもいい。

女2 (女1と同時に喋り続けている) ここにあり続けること。ずっと。この場所が、ここに。何も問われない、ただ、圧倒的にそこにある。そんな高みまで進んでいきたい。どうしても、ここに奇跡的な場所を……。感情はこうやって普通に働く。ただ、怒りを……。

二人の動きが止まる。

女1 (自分自身に) どうしてそうなるかな。

女2 (自分自身に) どうしてそうなるかな。

奏者たちが、音を止める。

二人、同時に話し始める。

女1 (女2に) どうしてそうなるかな。

女2 (女1に) どうしてそうなるかな。

女1 ……どっちが。

女2 私は怒ってるだけ。

女1 本当に？
女2 そうよ。
女1 八つ当たり？
女2 してない。
女1 そうなの。

間。

二人は同時に話し始める。

女2 確かに子供っぽかった。何を期待していたのか、全然そんなつもりもなかったのに、裏切られた気がしたの。それでも、この流れを止めてはいけない。何かの意味を求めているのでなく、ここに存在できる音だけを、ただひたすら求めていく。もう、十分に掴みかけている。自分でも信じられない確信がある。

女1 ここにはもういられない。降りてしまった自分と向き合う必要なんかなかったのに、嘘でもなんでもない。私はまだ、舞台の上に居たかった。何か違うことをするべきだったのかもしれない。でも、できなかった。音を求めていた。手放すことができなかったのに、自分でも信じられないほど苦しい。

沈黙し、動かない二人。

女2 終わらせても構わない。
女1 結局解決しない。
女2 したいの？
女1 ……。
女2 正しい終わり？そんなものあるの？
女1 あなたの苛立ちが、
女2 気のせいよ。
女1 違うでしょ。

間。

女2 先を見るばかりで、今と向き合うことすらしない。
女1 価値のあるものを求めているだけ。
女2 嘘。
女1 なんて。
女2 それは嘘。
女1 だから、なんで。
女2 関係なくせに。
女1 知りもしないで、
女2 知る必要がある？
女1 何を見てそんな、

女2 何を？
女1 こっち見てから言いなさいよ。
女2 できるからやってるだけ、
女1 できるから、
女2 ただ、それをやっているだけ。
女1 私にはできる。
女2 死んだ様な顔で。
女1 できる。
女2 後ろめたい思いをしながら、
女1 莫迦な……。
女2 なんて？
女1 そんな莫迦な……。
女2 違うって言えるの？
女1 違う。
女2 嘘。
女1 違う。

間。

女2 去年は、何回聞いた？
女1 ……。
女2 聞いたの？
女1 全部、
女2 全部。事務所でモニターしていただけでしょ。あとはなに？録音？
女1 リハーサルは、
女2 五分も居ない。いつも。
女1 十分。
女2 何がわかるの？
女1 そんなものでしょう？
女2 何と向き合ってるの？
女1 次のこと。
女2 仕事。
女1 仕事よ。
女2 こなして先に進めていくだけのものによりかかって、
女1 どうしてそうなるの。
女2 聞こえるから。
女1 何が、
女2 前に進んでいるわけじゃない、ただできることによりかかって、時間に流されていくだけ。
女1 陳腐ね。
女2 陳腐でも、それが、

女1 ただの、
女2 ただの？
女1 それが……。

間。

女1 役に立たない。
女2 関係ない。

奏者達が音を奏で始める。

その音は、何に対して奏でられているのか、その音を聞いて、二人は踊るだろうか。曖昧か、具体的なのか。その音は誰の心をのせて流れているのだろうか。

二人の会話は徐々に、言葉とは裏腹に、不必要かとも思われるほどの荒々しさをはらんでいく。

女1 嫉妬していたのよ。自分にできることをやると心に決めながら、ずっと嫉妬していたの。

間。

荒々しさはむしろ、声色や演技に直に反映するわけではない。
女1の後悔と、女2の耽美がむき出しで存在しはじめる。

女1 ……舞台に、

女2 舞台？舞台なの？

女1 ……私は、

女2 その嫉妬は、必要？

女1 考えたこともなかった。

女2 思わないの？

女1 何を？

女2 手に入れたものは？

女1 失っただけ。

女2 残念ね。

女1 美しいものが仕上がっていくほど、

女2 それを感じられるなら、どうしていつまでも嫉妬なんか、

女1 (女2を遮り) あなたの計画が進んで行く、私はただ、できることをこなすだけ。

女2 (女1に構わず同時に) あなたがいなければ、なにも進まないのに。

女1 あの場所に戻りたい。

女2 降りると決めたのはあなた。でも、

女1 でも、そう。力づくでここから離れることもできない。

女2 どうして？

女1 どうして？

女2 聞くまでもなかった。

女1 手応えがあるの、

女2 自分がやっていることを理解しているから、
女1 理解できる。だから離れられない。でも、これは……。
女2 まだきつと、できることはある。
女1 まだ。それが理解できることも、苦しいのに、
女2 それならなぜ、
女1 (女2が遮るのも構わず) それなのに、どんなに前を見たとしても、どんなに前進したとしても、私はもう、舞台の上の人間じゃない。
女2 (女1に構わず同時に) どんなに先を見ようとしても、どうやって前進すればいいのかわからないのが普通なのに、それをあなたは、
女1 私は、
女2 あなたは、
女1 私を見ていないのはあなた。
女2 初めてあなたを見た時に、あなたはもう降りていた。
女1 ああ。そうよ。(心を押し殺すことを思い出す) そうだ……。
女2 見える場所には居なかった。
女1 押し殺して、
女2 欲は押し殺すもの。
女1 ただの(欲)……。
女2 そう決めたんじゃないの？
女1 これは……。

奏者たちが、ゆっくりと音を止める。

女1 もう、それはつまり……。
女2 舞台から降りたことを後悔して行き場をなくしているなんて、その方が陳腐だわ。
女1 確かに、よくある話かもしれない。
女2 たまに？よくあること？
女1 死んであなたの足元に横たわる自分しか見えない。
女2 これからもずっと。そうなの？
女1 どこにいればいいの？
女2 望む場所に。
女1 そこからは降りたの。
女2 繰り返しはもうたくさん。
女1 どうしたらいいの。
女2 とつくの昔に、舞台でも客席でもない場所に居るじゃない。
女1 ここはどこなの。
女2 わからないの？
女1 ここは、
女2 まだ、劇場の中。
女1 どうしたらいいの。
女2 覚悟は、

女1 あった。
女2 なぜ揺らぐの。
女1 見えるものが変わってしまった。
女2 残念ね。でも、ここはまだ劇場の中。あなたはまだ、劇場から一步も外に出ていない。
女1 だから苦しいの、
女2 後悔しているって言うなら、もっと遠くに逃げることよ。
女1 どうやって、
女2 覚悟もなく降りた、
女1 決めないで、
女2 決めてあげる。
女1 やめて。
女2 じゃあ死んで、考えることも声を出すこともやめればいい。
女1 できなかった。
女2 失敗した。
女1 これは、
女2 失敗が高くついてるだけ。
女1 ……。
女2 それは、何か特別なこと？失敗。失敗はいつでも高くつくし、とても痛い。
女1 失敗。
女2 残念ね。

間。

女2 続けるの？
女1 何を？
女2 失敗。
女1 どうすれば、
女2 さあ？
女1 失敗。
女2 涼しい顔で作ればいいのよ。ずっとそうしてきた様に。
女1 それは、
女2 ここに居ればいいの。
女1 ……。
女2 嫌なの？でも、私にはどうでもいい。あなたの失敗も、あなたの欲も。
女1 そうだった。
女2 信じないの？
女1 なにを？
女2 舞台の上で確信していたこと。
女1 ……。
女2 何もなかった？

女1 わからない。
女2 それは嘘。
女1 決めないで。
女2 決めてあげる。あなたが今死んでるって言うなら、生きていた頃に信じていたことを思い出すだけ。どうしてそれが途切れてしまったのか、ただの欲だと思っ様になったのか、
女1 でも、
女2 作るんでしょ？
女1 ここに居るから、
女2 他には無いわ。
女1 楽天的、
女2 そうね。
女1 気味が悪い。
女2 狂ってるの。
女1 ここに、
女2 きっと、あなたもそうだった。
女1 (これは、声になるだろうか。ただ、女の口の形は確かに女の言葉を映している) 何に狂っていたか、
女2 ここなら、きっと。
女1 (これも、声にならないかもしれない) 狂ったまま、狂ったまま……。
女2 揺らがないで、ここに。
女2 作る。それだけ。

女2、動きを止めて、女1を見る。

女1も、ゆっくりと女2の正面に立つ。

女2 作るのよ。ここになら、死人が蘇る魔法も、きっとある。

女2が差し伸べた手に、女1が手を伸ばす。

女1は、どんな魔法であれ、死人を蘇らせてはならないことを知っている。
溶暗。

終わり

女2も実際には死者のひとり。

女1を冥界から連れ出す力がそもそもあるのかといえば無い。
地獄。黄泉。

見てはならないのは、醜く変化しているからではないのか。
ならば、美を見て死の手に委ねられたら、どうなっていくのか。